

ていむにっか  
庭務日課

川口基督教会牧師 司祭 ステパノ 柳 時京

聖公会の司祭として、また川口基督教会の牧師として、毎日欠かさない仕事の一つに「聖務日課」というものがあります。英語ではデイバイン・オフィス (Divine Office) と言い、「教会が日々祈り続けるために整えた教会共同体の祈り」を指します。もともとイエス様が絶えず祈られたことから由来するもので、中世の修道院では、定められた時刻に祈りながら、教会共同体が一日の活動全体を神に奉献することを目的としていました。記録では、一日に9つもの礼拝を献げられたとします。つまり、日常生活の中で神のみ言葉を読み、神をたたえながら一日を過ごすことを意味します。

1989年に韓国ソウルの聖ミカエル神学院に入学してから、在学中は毎日聖餐式や朝晩の祈りをもって、一日の課題としていました。卒業後司祭に按手され、いざ教会の牧師になってみると、一人で勤務する時が多く、かつてのように共同体の祈りとして守ることは出来ないものの、自分なりに聖務日課に当たるような読書や祈りをしてきました。最近新型コロナウイルスの終息を望みながら、川口基督教会の皆さんとともに毎夜9時に主の祈りを献げていることも、そういう意味では、新たな聖務日課の一つと言えるでしょう。

さて、世界規模の気候変動の影響により、地球の平均気温が1～2℃上がったことで、北極の氷河が溶け始め、海面水があがりつつあります。その結果として最近の夏は以前より熱くなってきています。オゾン層破壊を防ぐため、二酸化炭素の排出を減らすことも世界規模で訴えられていますが、現実では国際的な協力体制が整わず、なかなか難しいようです。

そういう中で、今年も梅雨明けとともに真夏の猛暑期を迎えました。雨の日は例外ですが、夏場の川口基督教会の牧師の日課の一つは、庭の木々や花に水をやることです。一日でも水やりを怠ったら、木々の葉っぱもお花も、首を垂れてしょぼんとなってしまいます。引き継ぎの際に前任者から「大変ですよ」と言われたことを、今になって実感しています。しかし、水やりをしてから翌朝に出てみると、みんな首をまっすぐにして朝の挨拶をしてくれます。まるで朝の水やりを待っていたかのように感じます。

余計に伸びた枝を切り、絡まった周りの蔓をとってあげると、より早く、立派に成長します。私は、これを自分勝手に「庭務日課」と名付けました。聖務日課は、キリスト者としてお祈りとみ言葉を通して神様の息吹や真の命に繋がることでもあります。そのように、庭務日課は庭の木々や草花に、被造物の管理を命じられた者として、命の水を与えることです。

気候変動の改善とか、世界規模の環境問題に貢献することは出来なくても、「お造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」(創世記1:31)という

神様のみ言葉を実現していくために、せいぜい教会の庭の小さな命を支えることに、これからも励みます。そして、庭務日課のもう一つの喜びは、毎日のように虹と出会うことです。庭に注がれる滴の中に、いつも綺麗な虹がかかりますが、これこそ命をささえることによって得られる特権であります。人類への約束のしるしである虹と出会うため、コロナ禍を乗り越えるまで、今日も明日も、喜んで水やりに心掛けます。

